人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	個別人権課題をテーマとして効果的に取り扱った実践事例

１．基本情報

○都道府県名及び市町村名

福岡県筑後市

○学校名

福岡県立筑後特別支援学校

○学校のＵＲＬ

http://chiku-ss.fku.ed.jp/Default1.aspx

２．学校紹介

○学級数

小学部、中学部、高等部併せて４７学級

○児童生徒数

小学部５６人　中学部５９人　高等部１３７人（平成２５年５月１日現在）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

＜本校教育の基本理念＞
児童生徒の基本的人権を尊重し、深い愛情と理解を持って、個々の教育的ニーズに応じた適切な教育を行い、自立と社会参加の力を育成することに努める。

＜学校教育目標＞
児童生徒一人一人のよさをみつめ、伸ばし、たくましく生き抜く力を育む

＜人権教育に関する目標＞
○　授業と学校づくり
・校長を中心にあらゆる差別をなくす教育に取り組み、地域に開かれた学校づくりを目指す
○　地域支援と進路保障
・校内各分掌間の綿密な連携と、関係機関との連携で、児童生徒の「地域所属」を支援する。
・児童生徒の生活背景や思いを知った上で、自己選択を尊重した、組織的・継続的な進路保障に取り組む
○　職員の研修と学習
・職員の人権意識のさらなる向上と実践の交流を行う

○人権教育にかかる取組の全体概要

＜一人一人の「地域所属」を目指した取組＞

福岡県では、障害のある児童生徒が、居住地において自立した生活を行い社会参加するために、モデル地域において、「障害のある子どもの居住地校交流事業」を実施している。本校も指定校として、児童生徒が常に居住する地域の構成員として認められ、安心して暮らしていけるよう、教育活動において「地域所属」という言葉をキーワードとした取組を大切にしている。

本校に通学している児童生徒本人と家族の切実な願いは、生まれ育った地域に気兼ねなく所属し、安心して生活していけること、差別によって排除されないことである。しかし、特別支援学校に通っていることで、居住地域で正しく認識されていなかったり、様々な誤解や偏見からトラブルが生じたりすることも少なくない。

そこで、本校では、平成１４年度の校内研究で、「地域所属」という言葉について、「差別は排除という形をとる。私たちは、排除されず、排除せず、納得した状態で（自分たちが住む地域に）所属していくことをのぞむ。そうした状態を目指す用語として「地域所属」(Community Positioning）という言葉を用い、より多くの人に使われていくことを期待する。」という概念規定を行った。そうして、児童生徒の就学に関わる問題や地域校との交流及び共同学習を行う上での問題、学童保育の問題、更に卒業後の支援における問題などから、教職員が障害に対する正しい認識を深めるとともに、障害がある児童生徒の地域社会における生活を支援していく上での私たちの課題を明らかにし、「地域所属」の視点から職員間での共通理解や校外連携に努め、一人一人が大切にされる共生社会の形成を目指した「地域所属」支援の取組を行っている。

＊ここでいう地域とは、校区単位にとどまらず、市町村レベルの広がりを想定している。

＜具体的な取組＞

①　地域懇談会

本校の地域懇談会は、教職員と保護者が障害のある子供を育て支えていく途上で、疲れや焦り・不安等のために倒れるといったことを未然に防ぎ、共に生きていくことの喜びを実感できるようにしていくために、自治体関係者との連携を構築していくことを目指して平成１０年より毎年開催してきた。

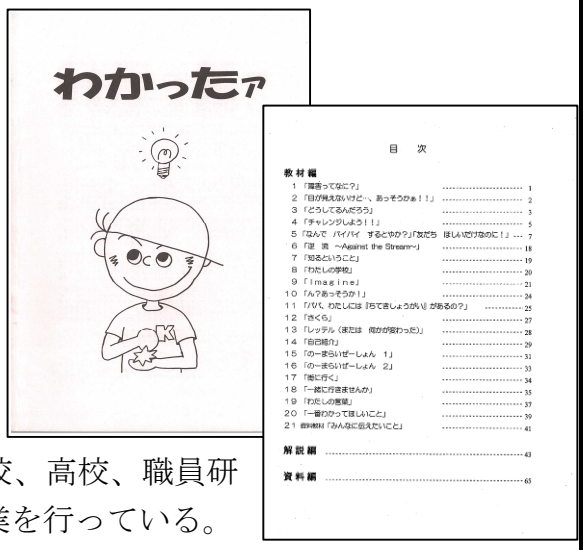
平成１０年度は、同和教育部（現在は人権・同和教育部）が新設され、その中で、児童生徒たちが、居住する地域の中でどのような生活をしているのか、家庭ではどんな悩みを抱えているのか等の課題を把握するためにＰＴＡの協力の下で開催した。

その後、社会福祉協議会や教育委員会・福祉事務所等、自治体関係者の参加も増え、会場をある程度市町ごとの単位でまとめて開催している。その中で、子育てや地域生活における悩み、学校教育や福祉制度に対する要望などの意見が交わされるようになった。

地域懇談会で交わされた主な内容は、『地域懇談会のまとめ』として書き起こし、本校保護者や職員・関係自治体へ配り、情報を発信・共有化するとともに協働し

て「地域所属」を目指していく取組に役立てている。

② 出前授業



地域校との交流及び共同学習の事前学習や、人権・同和教育の学習として、教材集『わかったァ』の教材を活用した出前授業を行っている。この教材集は、平成１７年度に福岡県立特殊教育諸学校（当時）の児童生徒支援担当配置盲・聾・養護学校長等連絡会議で編集された、障害への認識を深め差別をなくしていくための教材集である。地域の小学校、中学校、高校、職員研修、地域の研修会などで数十回の出前授業を行っている。

③ 交流及び共同学習

＜小学部＞

小学部では、学校が開設された昭和５４年の翌年から、本校の要請に応じていただく形で近隣の小学校との交流が始まった。様々な形態の交流を経て、昭和６０年からは、６年間を見据えた系統的な学校間交流を行っている。

交流の内容としては、学年ごとに年間４回から６回の交流と、本校運動会（交流種目）への相手校児童（希望者）の参加と相手校の運動会への本校児童全員の参加などである。

＜中学部＞

中学部では、昭和６０年に文部省（現、文部科学省）心身障害者理解教育推進研究指定校となった福岡県八女市の中学校から、本校に交流の申入れがあったのが始まりで、相手校が市立の小中一貫校となった現在も交流が続いている。

交流は、中学部の全生徒と相手校の７、８年生が１年間ペアを作って行っている。お互いの学校を訪ねて学習する直接交流、交流新聞や年賀状などを交換する間接交流などを通して、交流を深めている。

＜高等部＞

高等部では、近隣の特別支援学校生徒や農業高校の農業クラブとボランティア部の生徒と交流及び共同学習を行っている。特別支援学校の生徒とは各作業班に分かれ、作業学習の交流や、給食交流を行い、農業高校の生徒とも授業交流や給食交流、学年ごとにゲーム等をするなどの交流を行っている。

３．特色ある実践事例の内容

『地域所属』を基盤とした共生社会の形成を目指して

～ 「なんでバイバイするとやか？」等の教材・絵本の活用を通して ～

＜取組を始めたきっかけ＞

１０年前に、当時在籍していたＡ君が抱いてきた疑問や思いについて、教職員が多くの人たちと連携した取組を重ねる中で、気づかされるとともに、学校、家庭、地域におけるＡ君を取り巻く人間関係上の課題が一つ一つ明らかになっていった。そして、Ａ君自身も友達、教師、家族などとのかかわり合いを通して、自分のことを振り返り、自分の思いを伝えること、相手の思いを知ることの重要性に気づいていった。

Ａ君を「地域所属」させることを目指した取組は、平成１６年、Ａ君の地域生活がモデルとなった二つの教材「なんでバイバイするとやか？」「友だちほしいだけなのに！」の制作へと発展していった。

＜教材作成と活用のねらい、目的＞

教材化に当たっては、Ａ君に自分の下校後の生活と似たような場面・状況で起こる出来事を、教材の中の登場人物である地域の学校に通うきんじ君と養護学校に通うてつお君のそれぞれの立場に置き換えて捉えさせることで、より良い人間関係の在り方とは何なのかという意識を持ち、自分と他者に対する認識も深まるのではないかとの考えから作成された。平成１６年１２月、スライド化して本校中学部全員対象の人権学習で授業を行ったところ、Ａ君自身も自分のことを客観視でき、自尊感情を高めることにもつながった。

そこで、平成１７年１月、児童生徒支援担当者が配置されている特別支援学校６校が中心となり、障害への認識を深めるための教材集『わかったァ！』を作成し、発行した際に、人と人とのつながりやかかわり方を考えることのできる教材として、Ａ君の地域での生活をモデルに作成した二つの教材も掲載されることとなった。また、平成２０年、福岡県教育委員会が作成した人権教育学習教材集『あおぞら』にも転載された。さらに、平成２０年３月には、二つの教材がもとになり、絵本版『なんでバイバイするとやか？』として市販されることになった。

本教材（教材集・ＤＶＤ・絵本等）は、それぞれの登場人物の立場で、自分のことや相手のことに気付いたり考えたりしながら、お互いの関係のありようについてもとらえさせようとするものである。このことは、障害の有無に関係なく人と人とのつながりやかかわり方を考え、一人一人が大切にされる共生社会を目指していく上でも重要な視点である。

本校では、児童生徒の「地域所属」に向けて、積極的に本教材を使った授業の展開を行い、実践を重ねてきた。本教材の実際の活用例として、本校児童生徒及び地

域校の児童生徒に対する取組の中からそれぞれ紹介する。

＜作成した教材の解説＞

○　教材名　「なんでバイバイするとやか？」「友だちほしいだけなのに！」

「なんでバイバイするとやか？」では、地域の小学校に通うきんじ君の視点から、特別支援学校に通っているてつお君の行動や思いにふれるという場面を、また「友だちほしいだけなのに！」では、てつお君の視点からきんじ君の行動や思いにふれるという場面を設定した。教材作成に当たっては、「なんでバイバイするとやか？」では、地域の小学校から特別支援学校中学部に入学してきた一人の少年とかかわりのある近所の小学生や中学生たちの、また「友だちほしいだけなのに！」では、地域の小学校から特別支援学校中学部に入学してきた一人の少年の実生活での疑問や考え・気持ちの変化等を参考にしながら構成した。このように、同じ場面・状況を特別支援学校生徒の視点からとらえた教材と、地域の小学生の視点からとらえた教材を活用することで、お互いの行動や思いを考える機会となり、更に認識が深まるものと思われる。また、双方向から自分のこと、相手のことを考えるのは、より良い人間関係を作る上での基本でもある。単に障害への認識を深めるための教材としてだけではなく、人と人とのつながりや、かかわり方を重視した教材としての活用も期待される。

【資料１】本教材における対象者別の目標及び留意点

対　象	目　　標	学習上の留意点
障害のある児童生徒	・きんじ君とてつお君のそれぞれの立場で、自分のこと・相手のことを考える。 ・学校や地域の中で、同じような思いや悩みがないか、自分の生活を振り返る。 ・気持ちの伝え方・より良い関係の作り方を考える。	・教材「なんでバイバイするとやか？」「友だちほしいだけなのに！」を合わせて活用し、具体的に比較して考えさせる。 ・イメージが広がるよう、教材を絵本や紙芝居・スライド化したり、具体的場面を劇で表現したりするなど、実態に応じた活用の仕方を工夫する。 ・地域生活の実際を話し合ったり、具体的事例等を紹介したりしながら、関連付けて考えさせる。
地域校の児童生徒	・きんじ君とてつお君のそれぞれの立場で、自分のこと・相手のことを考える。 ・きんじ君が抱いている様々な「なんで」という疑問を一緒に考える。	・教材「なんでバイバイするとやか？」「友だちほしいだけなのに！」を合わせて活用し、比較して考えさせる。ただし、登場人物の考え方を押し付けないよう留意する。 ・必要に応じて教材の絵本・紙芝居・スライド化や具体的場面の劇化に取り組むなど、イメージが広がるよう工夫する。 ・各自の実体験と照らし合わせて考えさせた

	・きんじ君のてつお君への見方がどう変わり、なぜ変わっていったかを考える。 ・気持ちの伝え方・より良い関係の作り方を考える。	り、小集団での話合い等を取り入れたりしながら、より多くの意見を出し合えるよう促す。 ・地域生活の実際を話し合ったり、具体的事例等を紹介したりしながら、関連付けて考えさせる。

※前掲教材集『わかったァ』より引用

＜取組の内容＞

① 障害のある児童生徒への活用

平成２３年度の本校中学部３年生は、２３名中１７名が、地域の小学校から本校中学部に入学、又は年度の途中で地域の小学校・中学校から転入学してきた生徒である。そのような生徒を中心に、最初は特別支援学校と地域の学校とのシステム等の違いに戸惑ったり、自分の気持ちを友達や教師等に理解されなかったりして、納得できずに落ち込む姿や生徒間のトラブルへと発展するケースも多々見られたが、その都度教師や生徒同士で向き合って話をする機会を持つとともに、３年生になり学部のリーダーとしての責任感等も育まれる中で、徐々に生徒同士のかかわりが広がり、学年全体としてのまとまりも見られるようになってきた。しかし、生徒同士のトラブル等は少なくなったものの、お互いのかかわり合いが深まることによる人間関係上の悩みが新たに生じたり、かかわり合う中で適切な言葉や行動につながらずにイライラしてしまったりする等の課題が明らかになってきた。そこで、各自の成長過程に伴う人間関係上の悩み等を共有し合い、一人一人がすてきな大人へと成長していくことを目指して、平成２３年１２月、本校中学部３年生全員（２３名）を対象に、当該学年担任団による本教材を活用した授業を行った。以下に、そのときの学習指導案（略案）を示す。

【資料2】 筑後特別支援学校中学部3年　特別活動学習指導案(略案)

中学部3年 特別活動学習指導案(略案)

指導者 中学部3年担任団
日 時 平成23年12月19日(月)
3･4校時
場 所 ふれあい広場

1 題材名「すてきな大人になるために」

2 題材目標

○自分の考えや気持ちを伝えることの大切さに気づく。
○友達の考えや気持ちを知ることの大切さに気づく。
○日常生活を振り返り、よりよい人間関係の在り方について考える。

3 準備物 ①絵本「なんでバイバイするとやか？」 ②電子黒板 ③パソコン ④劇衣装

4 展開

配時	学習内容・活動	支援と指導上の留意点	準備
10:45	1 はじめの挨拶をする。 2 昨年と1学期の授業を振り返る。	・B班の班長が挨拶をする。 ・人権とは何か。人権問題「戦争・差別・いじめ」だけでなく、嫌な思いをしている人はいないか。日常で人権を守ることについて話す。	
10:50 10:52 11:12 11:17	3 本時の目当てを知り見通しを持つ。 4 絵本の読み聞かせを聞き、スライドを見る。 『何でバイバイするとやか』 『ともだちほしいだけなのに』 5 スライドの中から一場面を教師の劇で見る。 「バイバイといいながら友達に近寄る」 6 スライドや劇の内容と自分の生活とを重ね合わせて話し合う。 ・友達の意見や感想を聞く。 ・自分の意見を言う	二つの作品をそれぞれ読み聞かせる。（教師C、教師D） ・一コマずつ説明をし、同じ場面でもそれぞれの立場で気持ちがあることに気づかせる。 ・きんじ君とてつお君のそれぞれの「なぜ」「どうして」に注目させる。（教師E） ・場面のイメージが広がるように教師が実演する。 ・きんじ（教師C） きんじの友達（教師F） てつお（教師D） ・なぜ「バイバイ」といって近づいていったのか、意見を求める。（教師G） ・どうすれば、一緒に遊べるか。てつお君に教えてあげたり、てつお君役になったりするよう促す。 ・解答は1つではないことを伝えすべて肯定的に捉える。	② ②③ ④
11:37 11:40	7 まとめ 8 終わりの挨拶をする。	・自分の気持ちを伝えることや、相手の気持ちを知ることの大切さについて考えることができたことをまとめ、班（又はクラス）で、更に深めたり感想を述べ合ったりするように伝える。 ・H班の班長が挨拶をする。	

② 地域校の児童生徒への活用

平成２５年６月、本校近隣中学校の全校生徒２２２名を対象に、本校職員が本教材を活用した授業を行った。はじめに特別支援教育とは、障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となる教育であり、一人一人が大切にされる共生社会を目指すことが大切であることを

強調した。また、障害への正しい認識を深める教材集『わかったァ』や福岡県教育委員会が作成した人権教育学習教材集『あおぞら』内の他の教材と併せて、本教材（ＤＶＤ版及び絵本）を活用し、自分の思いを伝えること、相手の思いを正しく知ること、お互いの立場で考えることが、より良い人間関係の構築につながり、一人一人が大切にされる共生社会を形成する上でも重要であることを確認した。以下に、そのときの授業で使用したレジュメの内容を示す。

【資料３】　近隣中学校の特別支援教育講演会レジュメ

「一人一人が大切にされる共生社会を目指して」
～ 思いを伝え、思いを知り、お互いの立場で考える ～

１　特別支援教育とは
　自己紹介にかえて
　筑後特別支援学校とは
　特別支援教育とは

２　「しょうがい」って何？
　自分がとらえている今のイメージは・・・？
　生活する姿を思い浮かべる、身近な生活場面で考える
　バリアフリーとユニバーサルデザイン

３　絵本「なんでバイバイするとやか？」を通して
　絵本のモデル「てつお」との出会い
　二人の主人公「きんじ」と「てつお」の話
　お互いの思いをつなげるために

４　思いを伝え、思いを知り、お互いの立場で考える
　①「バイバイするときの気持ちってどんな気持ち？」
　②「先生、嫌なことがあった」と「先生、すごいことがあった」
　③相手の良いところに気づく・自分の良いところに気づく

５　一人一人が大切にされる共生社会を目指して
　①より良い人間関係を形成するために大切なこと
　②言葉は自分で選べるが、どういう言葉で表現するかは感性が問われる
　③自分の経験と重ね合わせ、相手の立場で考えることのできる優しさを持つ

授業当日は、全校生徒に対し、体育館で７０分間の一斉授業形態で行われたこともあり、一人一人との詳細なやり取りはできなかったが、学習後、生徒たちは各クラスに戻り、担任とともに授業の振り返りを行った。

４．実践事例の実績、実施による効果

＜取組の実績＞

① 障害のある児童生徒への活用

本時授業に取り組む以前から、友達とのトラブルが続いたり自分自身の言動がコントロールしづらくなったりする数名の生徒とは、個別に話をする時間を作り、絵本版『なんでバイバイするとやか？』の読み聞かせを行っていた。そのことにより、生徒たちは、自分の体験や思いと重ね合わせて考えることができ、自ら他者とのトラブルの解決の道筋を探すきっかけが得られるなどの効果もあった。また、本時授業を行ったことで、みんなと一緒により良い人間関係について改めて考えることができ、授業を通しての理解が更に深まった。

②地域校の児童生徒への活用

地域校の児童生徒の感想から、互いを理解することの大切さや「共生」という生き方への共感など、障害を持った児童生徒が「地域所属」して生きていくことへの理解が深まる授業となった。

＜児童生徒の感想＞

・思いを伝え合うことは難しいけど、自分の思いを言うのは大切だと思いました。
・これから生活していく中で、どんな言葉で表現すれば自分の気持ちが相手に伝わるのかを考えて表現しようと思いました。
・私も人間関係で悩むことがありますが、一人で考え込まず、友達や他のみんなに相談することも大切だと思いました。
・相手を理解することの大切さを改めて実感しました。
・今日の話を聞いて、てつお君は言葉ではうまく伝えられないけど、心の中では「遊びたい」と思っていることや、男の子のためを思って言っていることがよくわかりました。
・これまでバイバイするときの気持ちなど考えたことはありませんでしたが、今日の話の中で一番印象に残りました。
・ふだんから相手の立場を考えて行動したいと思いました。
・お互い理解し合いながらつながりあっていくことが大切だと改めて思いました。
・相手の気持ちは見えるものではないので、うまくコミュニケーションをとれるか心配ですが、相手の気持ちになり、言葉を選んで会話したいと思います。
・「障害」があっても、一人一人個性があり、少し手助けがあれば皆と同じように生活できることを学びました。
・これからいろんな人と出会うと思うけど、共に生きていきたいと思います。
・絵本の特徴として、最後は輪になってどちらからも読めるというのと、「障害」という言葉を使わずに書いてあるのはいいなあと思いました。

・私は「障害」のある人たちをばかにしたようなところがあったけど、今日の話を聞いてわかったことを今までの私のように思っている人たちに伝えていこうと思いました。
・偏見をいだいている人がいたら、説明できるような人になりたいです。

５．実践事例についての評価

＜成果と課題＞

人権教育の全体の取組としてはＰＴＡとも連携しながら、地域懇談会などを通して、児童生徒の放課後や長期休業中の地域での暮らしの課題が共有されて、支援体制が充実してきた。放課後や長期休業中の保護者の負担が減り、児童生徒も毎日楽しく過ごせるようになってきたという保護者の声もある。また福祉サービス利用方法についての行政などからの情報提供や保護者同士が情報交換する機会が増え、卒業後の進路や暮らしについても情報交換がなされるようになった。地域でトラブルに巻き込まれたときなども保護者と学校とが情報共有する大切な場となっている。

子供たちが、生まれ育った地域に気兼ねなく所属し、安心して暮らしていけるようにという保護者の願いと、学校が大切にしている「地域所属」という取組が重なって連携が深まっている。

本教材・絵本のモデルとなったＡ君は、成人した今でも家庭・地域・職場でのそれぞれの人たちとのかかわり合いの中で多くのことを学び、日々成長を続けている。

その一方で、現在本校に在籍している児童生徒をはじめ、交流校の児童生徒の中にもＡ君のように、自分の思いを伝えたり、相手のことを考えて行動したりすることが苦手な児童生徒は少なくない。しかし、この教材を学ぶことを通して、お互いの立場で考えることの大切さに気づくことにつながり、より良い人間関係を形成していくための第一歩となりつつある。この実践により、取組の視点が普遍化されていく中で、一人一人が地域の中で大切にされる「地域所属」を基盤とした共生社会の形成につながるものと思われる。そのためにも、これからも本校児童生徒をはじめ、地域校の児童生徒や地域の人たちに対し、常にていねいな発信と連携を心がけていきたい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

福岡県立筑後特別支援学校
学校間交流を推進し、子供の課題を地域と共有する取組、自主教材を開発・活用して多様な可能性を提案する取組である。小学部、中学部、高等部において、近隣諸学校との交流や共同学習が丁寧に計画・実施されている。また、特別支援学校生徒の視点と地域の小学生の視点からとらえた教材（「なんでバイバイするとやか？」「友だちほしいだけなのに！」）を開発し、発達段階に応じて絵本版を作成しており、児童生徒が自ら他者とのトラブルの解決の道筋を探し、自分のことと相手のことを相互に考える契機となるように学習の工夫がなされている。